

ドキュメンタリー映画

『Cuba/Okinawa — サルサとチャンプルー』

波多野 哲 朗

いまから 80 年ほど前に沖縄からキューバへと移り住んだ日系移民が、その後どのような人生を歩み、またその末裔たちは今どんな思いで暮らしているのか。中南米諸国への移民の中では、これまでもっとも情報が乏しいと言われてきたキューバ移民の生きざまについて、この映画はその一端を明らかにするだろう。

7 年がかりの撮影だった。2000 年 3 月、私はキューバを旅行中にふとしたきっかけからキューバ本島の南 50 キロの海上に浮かぶ離島に渡った。するとその島には 100 人を超える日系人の家族が住んでいて、私はその人たちから思いもよらぬ大歓迎を受けたのである。ただ、日系人といっても一世はわずかに 2 人、ほとんどが二世、三世で日本語を話す人は滅多にいない。しかしこの島では、キューバ本島では感じられなかった日系人たちの故国に対する熱い想いが、ひとときわ激しく渦巻いていたのだった。その島の正式名はフヴェントゥ島（青年の島）、しかし人びとはピノス島（松島）と呼んでいる。沖縄の約 3 倍の面積を持つが、人口は 10 万人に満たない。人びとのほとんどは島の北部に住み、南部はいまだに手つかずの自然そのもので、ながらくこの島は不毛の土地と見なされてきた。しかしかつ



てこの島には、首都ハバナに次ぐ多数の日本人が住んでいたのだった。

キューバという国自体、私たちの戦後史に登場する機会は極めて少なかった。しかもそこから更に隔てられた離島で、数多くの日本人が帰国の夢を果たせずに死んでいったという事実は、これまでけっして歴史に記されることがなかったし、また今後も記されることはないだろう。しかしいまなお島の中心地ヘロナの共同墓地の片隅には、日本人の名を刻んだ一群の小さな石碑が並んでいる。かれらは果たせなかった帰郷の夢を、せめて「松島」という島の名に託す想いで死んでいったのだという。私はそうした亡霊たちの想いを、いまこの映画によってかれらの故郷へと届けたい。

1000 人を超える日系キューバ移民のうちたった 2 人の生き残り、島津三一郎さ

んと宮澤カヲルさんに出会えたのもこの島だった。私は 2004 年にこの島を再訪し、2 人の貴重な証言をカメラに収めることができた。しかし今年 3 月、この映画を編集している最中に宮澤カヲルさんが亡くなり、一世の生存者は島の老人ハウスに住む島津三一郎さん只一人となった。島津さんは今年の 12 月に満 100 歳の誕生日を迎える。

この島には、第 2 次大戦中、日本人の成人男子全員が収容された巨大な監獄跡が残っている。東京ドームのような半球形の建物の中央に監視塔が建つこのパノプティコン（一望監視方式）の監獄の恐るべき情景は、この映画の見どころの一つかも知れな

い。ちなみに 1953 年最初の蜂起に失敗して捕えられたフィデル・カストロも、約 2 年間ここに収容されていた。この島はもともと流刑の土地だったのである。

この映画のタイトルが「Cuba/Okinawa」となっているのは、一つには 1920 年代に沖縄からキューバへと渡った一世とその末裔たちを主人公とする物語だからである。しかし理由はそれだけではない。私はこの映画で、キューバと沖縄という全く異なる土地で暮らす人々の精神を通底する世界を描きたかった。それは私にとって、言葉では語れない、映像と音楽でしか語れない世界であった。（はたの・てつろう 映画監督）

ラテンアメリカ参考図書案内

『日系人とグローバリゼーション ―北米、南米、日本』

レイン・R・ヒラバヤシほか編 人文書院 2006 年 6 月 536 頁 6,000 円＋税

ロサンジェルス全米日系人博物館の企画による、国際日系研究プロジェクトの成果の一つ。グローバル化が日系人のアイデンティティに及ぼした影響について、第 1 部「グローバル化と日系人アイデンティティの形成」は南北アメリカへの移住と日系人の文化や社会の成立に関する歴史的考察、第 2 部「日系人アイデンティティの形成」はペルー、ボリビア、パラグアイ等を事例に、日系人コミュニティの形成と相互のつながりを、社会的慣行、家族、宗教、教育、政治、経済の面におけるアイデンティティを分析している。第 3 部「日系人アイデンティティの形成阻害」は、ペルー、ブラジル、アルゼンチン等でのジェンダー、日系映画制作者の作品に見る人種やエスニシティ、日本への“デカセギ”現象の経済学的視点からの考察と、その就労問題と子女の教育、日系であっても“外国人”視される中での日本での多文化共生の可能性、ラテンアメリカへの移住者の中で多い沖縄出身者と本州出身の日本人とのアイデンティティを含む諸問題を取り上げている。第 4 部「回顧と展望」は、3 人の在米編者がこれらの論考を分析している。

7ヶ国 18 人の研究者による 20 の充実した事例研究センターの考察は、近年の日系社会、在外・滞日日系人の変化を知るうえで有益な資料である。 [桜井 敏浩]